

## 研究ノート

# 東亜協会について

——1906~1929 年——

杉山 亮

### 目次

はじめに

第 1 節 東亜協会の概要

第 1 項 東亜協会の結成

第 2 節 東亜協会の活動

第 1 項 『東亜の光』

第 2 項 講演会活動

第 3 項 研究会

第 3 節 東亜協会の参加者

第 1 項 会員

第 2 項 評議員及び委員

小括

### はじめに

井上哲次郎は、『勅語衍義』、『儒学三部作』などの著者、「国民道徳」運動の鼓吹者として知られ、近年研究が活発化しつつある。しかし、井上が後半生を費やした『東亜の光』とその母体である東亜協会に焦点をあてたものは少ない。

『東亜の光』とは 1906 年 5 月に井上が門下生浦谷熊吉らと協力して発行した雑誌であり、東亜協会はその発行機関として結成された。この団体には井上

の東京帝国大学の同僚や門下生が多く参加し、雑誌の刊行以外にも活動を展開していた。井上の日記には連日のように入会者の氏名や東亜協会関係者の来訪が記されている。井上の後半生の行動と思想的背景を研究する上で東亜協会の研究は不可欠なのである。しかし、東亜協会の全容は全くと言ってよいほど知られていない。本稿は『東亜の光』誌上の「彙報」を中心に、東亜協会の活動と運営に参加した人物についてまとめたものである。

管見の限りでは、東亜協会そのものを研究対象としたものは以下の2点である。まず挙げられるのは、小熊英二の研究<sup>1)</sup>である。小熊は東亜協会会員の人類学者鳥居龍蔵の足跡と『東亜の光』上の論説を分析することで、戦前の日本国民像を明らかにした。小熊によれば“日本国民”の自己意識は、明治期の単一民族国家意識から台湾割譲・朝鮮併合を経たことで、天皇を頂点にした多民族国家へと変化した。しかし、その多民族国家意識は天皇との距離によって日本民族を兄、台湾人・朝鮮民族を弟とする家族国家意識によって上下関係が明確に規定されていた。この上下関係を伴った多民族国家意識は「八紘一字」のスローガンの下、日本のアジア侵略の思想的背景を成したのである。

次いで挙げられるのは、荒川大輝の研究<sup>2)</sup>である。荒川は、1906年から1909年までの井上の論考と吉田熊次の論考に焦点をあて、両者の倫理思想の変遷を検討している。荒川によれば、日露戦争後の「青年の煩悶」に端を発する問題に対処するために、井上はまず「意志」と「修養」に焦点を置き、個人の自主性を重視した議論を展開していた。しかし、大逆事件を境に「国家」と「家族」に個人を内包した社会観を提唱し、個人の自主性を否定した「国民道徳」を鼓吹するようになった。主要な執筆者の一人である吉田熊次も井上と同様、当初は個人の活動に根ざした倫理学説を唱えていたが、同様に明治42年を境に「国民道徳」の鼓吹に加わった。

両者の研究は個々の人物・論説の分析としてはそれぞれ優れている。しか

---

1) 小熊英二『単一民族神話の起源：「日本人」の自画像の系譜』（新曜社、1995）

2) 荒川大輝「井上哲次郎による雑誌『東亜の光』創刊』『日本史学集録』（筑波大学日本史談話会、2017、11-23頁）

し、小熊の分析は東亜協会よりも広範な国体言説の外延を分析の中心に据えており、東亜協会の内的な複数性を明らかにするに至っていない。また、荒川の分析は協会の中心人物である井上哲次郎・吉田熊次の論説に留まり、彼ら以外の人物や東亜協会の活動を分析していない。

明治後期から大正・昭和初期にかけての井上哲次郎を取り巻く言説空間を明らかにするには東亜協会の活動・参加者を総合的に分析する必要があるのだ。

そこで以下では、東亜協会の活動の概要と参加者を紹介する。

## 第 1 節 東亜協会の概要

### 第 1 項 東亜協会の結成

東亜協会は 1906 年 6 月に「我邦の精神界を指導し兼て教育を刷新し文學を振興する」<sup>3)</sup> ために結成され、1929 年に会長である井上哲次郎が襲撃事件で負傷し一線を退くまで『東亜の光』がその機関誌の役割を担った。

### 第 2 項 『東亜の光』の刊行

東亜協会の母胎は 1906 年に創刊された『東亜の光』である。井上哲次郎は 1896 年頃から雑誌発刊の意志を書生であり、後に初代編集主任になる浦谷熊吉に漏らしていた<sup>4)</sup>。その後、浦谷は 1905 年新潟中学を退職して上京し、同誌刊行の準備にあたった<sup>5)</sup>。刊行準備にあたって書肆との交渉など東京での準備に尽力

---

3) 「東亜協会規則」第 1 条 (『東亜の光』(1 巻 3 号) 弘道館、1906、143-144 頁) 143 頁

4) 浦谷熊吉「回顧 20 年」(『東亜の光』(20 巻 5 号)、1926、371-376 頁) 371 頁

5) 「辻本卯蔵及び浦谷熊吉来訪す、因て「東亜の光」発行の事を議す」(井上哲次郎『巽軒日記 明治三三年—三九年』(東京大学史史料室、2012)) 102 頁、1906 年 4 月 3 日付

したのは中井宗太郎(1879-1968)<sup>6)</sup>だった<sup>7)</sup>。第2号を出版した後、井上は浦谷を呼び出し「雑誌を経営して行くには、どうしても会員組織にして行かなければならぬ。でない、継続はなか／＼困難である。また会員組織になし会の仕事にしてやると、他の色々の事業もやると行くことも出来、旁々都合がよいと思ふが、どうだろう<sup>8)</sup>」と述べ、規約<sup>9)</sup>を策定し『東亜の光』第3号(7月1日刊行)

6) 1879-1966、明治 - 昭和時代の美術史家。明治12年9月19日生まれ。東京帝大を卒業後、明治42年新設の京都市立絵画専門学校講師となり、昭和17年校長。退職後、立命館大教授。日本・東洋美術史の研究と評論で知られる。昭和41年3月16日死去。86歳。京都出身。著作に「絵画論」「永徳と山楽」など。(『日本人名大辞典』)

7) 「回顧二十年」、372頁

8) 同、372頁

9) 以下が規約の全文である。

第1条 本会は我邦の精神界を指導し兼て教育を刷新し文学を振興するを以て目的となす

第2条 本会を名づけて東亜協会と云ふ

第3条 本会は「東亜の光」を以て機関となす

第4条 本会は特別会員通常会員及び賛助員より成る

第5条 都下に在りて特に本会の事業に協同する者を特別会員となす

第6条 本会の事業を賛成し規定の会費を納むる者を通常会員となす

第7条 名望ある人にして本会の事業を援助する者を賛助員となす

第8条 本会に左の役員を置く

会長一名 評議員若干名 委員若干名

第9条 会長は本会一切の事を総理す

第10条 評議員は本会の重要な事項を審議す

第11条 委員は編集事務及び協会の事務を担当す

第12条 本会は東亜叢書を発行し 講演を開き又は懸賞を以て論文美文等を募ることあるべし

第13条 本会は集会を催し思想の交換文芸の研究などをなすことあるべし

第14条 本会の通常会員たる者は左の特権を有す

第1項 講演及び集会に出席することを得

第2項 通常会員の寄稿は専門家の検閲を経て「東亜の光」に掲載することあるべし

第3項 通常会員には毎月定期発行の東亜の光を一部配布す

第15条 本会々員にして本会の体面を汚すの行為ありと認むるときは之を除名す

第16条 本会は都下に本部を設置す地方には支部を置くことあるべし

上で発表した。

### 第 3 項 日本学会の吸収

その後、有馬祐政が井上を会長に迎えて 1906 年に結成した日本学会を 1907 年に東亜協会の部会として吸収し、組織の大意が定まった。以後 1929 年 4 月に暴行事件で負傷した井上が『東亜の光』の運営を手放すまで東亜協会は井上を中心となって運営された。1929 年 5 月からは遠藤隆吉が総務として東亜協会の全事業を引き継いだ。『東亜の光』は『大東』と名を変え 1941 年頃まで刊行された。1921 年には伊藤恵を委員長として奈良県に地方支部が設置された。

## 第 2 節 東亜協会の活動

東亜協会は大別して 5 種類の活動を行っていた。①『東亜の光』の刊行、②例会の開催、③研究会の主催、④講演大会の開催、⑤東亜叢書の刊行である。以下ではそれぞれの内容を概説する。

### 第 1 項 『東亜の光』<sup>10)</sup>

東亜協会の母胎となり、協会の主要活動だったのが『東亜の光』の刊行である。その編集体制は会員の中から選ばれた 4 名から 10 名ほどの委員が担った。編集のまとめ役に編集主任が置かれ、奥付に編集人（後に編集者）として氏名住所が掲載された。また、編集主任は会計主任を兼任することもあった。庶務は発行人（後に発行者）として刊行の事務作業を総括した。彼ら委員は後述する研究会や講演会に参加し、その報告を『東亜の光』に掲載した。

---

但し支部の規則は別に之を定む

〔東亜協会規則〕『東亜之光』第 1 卷 3 号、弘道館、1906-3、143 頁

10) 同誌の形態、執筆陣、価格等の書誌的事情は荒川（2017）も参照されたい。

24年間の歴史の中で8人の編集主任が『東亜の光』編集に携わった。以下がその変遷である。

浦谷熊吉<sup>11)</sup> (1巻～8巻) → 島本愛之助<sup>12)</sup> (9巻～11巻) → 高木武<sup>13)</sup> (12巻～

---

11) 前職は中学校教師、退職して参加。井上の生誕百年記念会（1956年11月20日、東京大学で開催）では実行委員を務めるなど井上の秘書と称すべき人物である。

12) 1879-1931、京都生まれ。家族には後に福岡県貝島鉱業取締役となる徳三郎がいる。1893年同志社尋常中学校に入学。大島正徳と同窓生となった。1898年同志社尋常中学を卒業、翌年第四高等学校一部文科に進学。1902年7月四高を卒業、同年9月に東京帝国大学文科大学哲学科に入学した。東京帝大では主に中島力造に師事した。1905年東京帝国大学を卒業。新規程に基づき卒論を提出せず、試験（倫理学）によって卒業資格を得た。卒業後1906年4月渡米。サンフランシスコで邦字新聞の記者として働きつつ、カルフォルニア州立大学のホワイトソンに師事した。1909年帰国。1912年盛岡農林高等学校に農芸化学科が新設された際、修身・英語教授として赴任。1914年9月東京外国語学校に赴任。修身・教育学講座を担当した。1925年京城帝国大学新設に伴い、第一倫理学講座担当教授に内定。服部宇之吉らと共に欧米視察におもむく。帰国後の1926年京城帝国大学に赴任。1930年学位請求論文を東京帝国大学に提出。題名は「カントの実践哲学と「判断力批判」の目的論的思想の関係」。1931年4月京城の自宅にて急死。翌年博士号授与が認められた。主著に『自然派の倫理』（目黒書店、1919）、『人格の出発』（日進堂、1922）、『英国の政治道徳の基調としての功利主義の発達』（東京宝文館、1925）

13) 1879-1944、4月3日生まれ。旧制の松山、佐賀、武蔵の各高校教授などを歴任。『東西武士道の比較』を発表、以来武士道や日本精神に関する研究をおこなった。2月26日死去。66歳。熊本県出身。東京帝大卒。著作はほかに『日本精神と日本文学』『戦記物語研究』など。（『日本人名大辞典』）

14 卷 7 号) →藤岡蔵六<sup>14)</sup>(14 卷 8 号～15 卷 6 号) →伊藤恵<sup>15)</sup>(15 卷 7 号～16 卷 4 号) →神代峻通<sup>16)</sup>(16 卷 6 号～19 卷 3 号) →松坂達雄 (19 卷 4 号～19 卷

14) 1891-1949、愛媛県に生まれる。1904 年愛媛県立宇和島中学校に入学。1910 年 7 月第一高等学校に入学。芥川龍之介、井川恭らと親しみ。三人併せて「一高の三羽鳥」と称された。1913 年東京帝国大学文科哲学専修に入学。ケーベルから哲学概論を学ぶ。学生時代は芥川に親しく交わり、卒業寸前には夏目漱石を訪れた。

1916 年東京帝国大学を卒業。卒論は「カントの『純粋理性批判』に現はれたる時間論」卒業後は大学院に進学し、1920 年 7 月在籍した。在学中の 1917 年 4 月から 1921 年 3 月まで哲学研究室の助手として勤務した。1920 年 2 月中尾清恵と結婚。清恵は富山県魚津の酒造家大野彦次郎の娘であり、結婚当時は姉中尾雪の養女だった。1921 年 7 月上旬、文部省派遣の在外研究に選ばれ、ヨーロッパ留学に出発。桑木巖翼の推薦を受け、帰国後は東北帝国大学に新設される法文学部の助教授の内定を得た上での留学だった。出国後、コーエンの著作を和訳した『コーエン純粋意識の論理学』が出版された。留学中はドイツ、フライブルク大学でフッサールの現象学を学ぶ。

しかし留学中、和辻哲郎が蔵六の翻訳を批判した。蔵六は留学先から和辻の論文に反論するが、留学先からでは論考のやり取りにタイムラグがあり、効果的な反論が出来ないまま、エネルギーを空費していった。騒動の最中、蔵六の東北帝大赴任を阻止する運動が活発化する。結果、内定は立ち消えになった。1924 年 1 月に帰国した後は神戸の甲南高校(現甲南学園)の哲学・倫理学・心理学の教授に赴任するが 1928 年原因不明の病に倒れてしまう。甲南高校は創立者平生鈞三郎の特別配慮で雇用し続けるが、1931 年 3 月 31 日解雇された。東京に戻った後、父と自身の自伝『父と子』の執筆に着手し、1948 年 7 月に完成を見た。1949 年 12 月 21 日に死去した。主著に『カントの『純粋理性批判』に現はれたる時間論』『コーエンの純粋意識の論理学』『父と子』がある。(関口安義『悲運の哲学者—評伝藤岡蔵六』イー・ディー・アイ、2004)

15) 生没年不詳、1918 年東京帝国大学哲学科卒業、1921 年より奈良女子高等師範学校教授。主著に『最新倫理学』(日進堂、1921)、『日本文化と日本仏教』(駸々堂、1942)

16) 1892-1957、愛知県に生まれる。旧姓柴垣。1901 年神代家の養子となる。1907 年長崎の鎮西学院中等部に入学。在学中に呼吸器系の病を患い 3 年間休学。1914 年第五高等学校大学予科第一乙類に進学。1917 年東京帝国大学文学部倫理学科に入学。1919 年 4 月 20 日稲津文雄の長女八千代と結婚。1920 年東京帝国大学卒業。文部省普通学務局嘱託として勤務。翌年 3 月文部省普通学務局嘱託を依願退職。翌月より東京帝国大学文学部の助手、青山学院英語師範科教授として勤務。翌年青山学院を依願退職。東洋大学・日本大学・東京歯科医学専門学校・東京女子大学・実践女子学校専攻科・東京府立第五中学校などの講師を歴任。1927 年高野山大学文学部教授。

9号) →神代峻通(19巻10号～20巻4号) →長谷川哲平(20巻5号～24巻

また、出版人は遠藤隆吉(1巻～6巻10号) →岸田繁次郎(6巻11号～8巻12号) →角田松濤(9巻～11巻1号) →市澤彌一(11巻2号～11巻12号) →岩井勇蔵(12巻～13巻10号) →鹽練忠治(13巻11号～15巻5号) →河野重治(15巻6～8号) →熊崎閑田<sup>17)</sup>(15巻9号～24巻4号)の順に推移した。

この内、浦谷熊吉と遠藤隆吉、島本愛之助、伊藤恵は評議員として協会運営にも関わった。また、会員から編集委員が選ばれ誌面の編集にあたった。その変遷は以下の通りである。

鈴木周作(1巻2号～4巻12号) 信近春城<sup>18)</sup>(1巻2号～5巻5号) 堀田相

1937年文学部長。1941年文学部長を辞任。1946年GHQによる公職追放により高野山大学教授を辞任。高野山真言宗經典翻訳局に勤務。1951年高野山大学教授に復職。1959年病氣療養中に心臓まひによって急死。(「神代峻通年譜」(『神代峻通講話集』553-557頁)

17) 1893-1975、11月19日熊崎忠太郎の長男として岐阜県益田郡萩原町に生まれる。1898年12月臨濟宗禅昌寺三木文敬の徒弟となり化導を受ける。1901年4月8日得度。1911年4月県立斐太中学に入学し、大正2年京都花園学院に転校したが、1918年中途退学後、東京二松学舎に入学。1919年3月二松学舎を卒業。同年4月東洋大学に入学し。1923年3月より「東亜の光」編集に携わる。同年4月東洋大学卒業とともに三輪政一の推挙により上宮教会の主事となる。河瀬秀治、境野黄洋、加藤咄堂、高島米峰、柴田一能等の指導を受け、聖徳太子の遺訓を奉じて教化事業に専念する。1923年9月関東大震災のため本郷・沓岐坂の上宮教会会堂焼失。以後復興に当たる。当時東京全市殆ど灰燼に帰したが、三輪政一と相談の上、震災者救護のため東京府の委託事業として簡易宿泊所を建設し、その経営に当たる。1928年3月御大典記念事業として日本宗教大会(神仏基)が開催され、主事として活躍。「日本宗教紀要」なる。1929年4月仏教年鑑社を創立し、1930年「仏教年鑑」創刊号を発刊、1938年度版まで発行する。1934年3月大内青巒が創立した仏教書肆鴻盟社を継承する。1934年8月臨濟宗円覚寺派正安寺(横浜市戸塚区)住職となる。1945年3月戦災のため鴻盟社焼失し、曹洞宗宗務庁地下において業務を行う。1963年1月鴻盟社ビル落成。1969年8月財団法人熊崎報恩財団の設立。初代理事長に就任する。1974年4月自坊正安寺に隠居。1975年8月3日遷化。享年81歳(「熊崎閑田師略歴」『一般財団 熊崎報恩財団』公式HP (url:https://www.kumazakihouon.or.jp/ 最終閲覧日2019年6月1日)

18) 1885-1910。明治時代の日本画家。

明治18年生まれ。深田直城、菊池芳文、橋本雅邦に師事する。各種の絵画共進会

爾 (1 卷 2 号~8 卷 12 号) 中井宗太郎 (1 卷 2 号~4 卷 12 号) 葉山萬次郎<sup>19)</sup> (3 卷 1 号~24 卷 4 号) 鈴木三重吉<sup>20)</sup> (3 卷 1 号~24 卷 4 号) 秋山梧庵 (3 卷 1 号のみ) 浦谷熊吉 (3 卷 1 号、19 卷 1 号~24 卷 4 号) 谷慶祐 (3 卷 2 号~4 卷 12 号) 水島耕一郎<sup>21)</sup> (3 卷 2 号~8 卷 12 号) 太田黒作次郎 (4 卷 4 号~8 卷 12 号) 高木武 (5 卷 1 号~8 卷 12 号、19 卷 1 号~24 卷 4 号) 吉田豊吉 (5 卷 1 号~24 卷 4 号) 青木昌吉<sup>22)</sup> (5 卷 1 号~24 卷 4 号)

---

や内国勸業博覧会で活躍。明治 40 年国画玉成会の結成に参加し、同年文展で「釈迦に頻王」が 3 等賞。歴史画を得意とした。明治 43 年 2 月 5 日死去。26 歳。岡山県出身。(『日本人名大辞典』)

- 19) 1877-1960、長崎県生まれ。1890 年平戸の猶興館中学校に入学。翌年猶興館館主松浦詮伯爵の孫、陞の伝役に抜擢され上京。上京後は松浦家に仕える傍ら、日本中学校に通った。1899 年第一高等学校文科を卒業。1902 年東京帝国大学独逸文学科を卒業した。卒業後大学院に進学し、1903 年東大文科大学講師、1908 年一高ドイツ語囑託講師、翌年には一高教授に就任した。1922 年一高を辞職、文部省督学官となった。翌年学校制度研究のために欧米視察。帰国後は山形高等学校校長、第七高等学校造士館長を経て 1932 年大阪外国語学校校長に就任した。1942 年大阪外国語学校校長を免職となり、日本中学校校長に就任。1946 年帰郷。1955 年松浦史料博物館館長に就任。在職のまま死去。主著に『独逸国民文学史』『近世独逸文学史』『戦後の独逸』。(上村直己『『独逸国民文学史』著者葉山万次郎』『日本古書通信』第 62 卷 2 号 (通巻 811 号) 日本古書通信社、1997、13-15 頁)
- 20) 1882-1936、明治 - 昭和時代前期の小説家、児童文学者。明治 15 年 9 月 29 日生まれ。夏目漱石に師事。小説「千鳥」「桑の実」を発表。大正 7 年「赤い鳥」を創刊し、芸術性ゆたかな童話・童謡の創作を提唱。坪田譲治、新美南吉らの童話作家をそだてた。昭和 11 年 6 月 27 日死去。55 歳。広島県出身。東京帝大卒。童話集に「世界童話集」。(『日本人名大辞典』)
- 21) 1882-1944、岡山県生まれ。津山尋常中学校、第七高等学校を経て 1910 年に東京帝国大学文学部英文学科を卒業。大学院には進学せずに英書の翻訳を手がけた。1913 年浦和尋常中学校の教員となるが、4 か月後に辞職。沢柳政太郎の提案に従って 1917 年週刊誌『週』を創刊、経営者として携わった。1918 年『週』は 46 号を最後に廃刊。1921 年東北大学の狩野文庫の整理保管の担当官として赴任。1925 年姫路高等学校に着任。論理学と哲学・心理学を講じた。1927 年には官命によってドイツ留学。1929 年帰国。1943 年停年退職。(水島宜彦『水島耕一郎評伝』文芸社、2012)
- 22) 1872-1939、東京生まれ。1888 年第一高等中学校入学。1894 年帝国大学文科大学独逸文学専攻に入学。1897 年東京帝国大学大学院に入学。19 世紀ドイツ文学を

葛岡敬雄 (6 卷 6 号～6 卷 12 号) 伊藤吉之助<sup>23)</sup> (8 卷 5 号～24 卷 4 号) 山岸光宣<sup>24)</sup> (9 卷 1 号～24 卷 4 号) 武藤儀亮 (9 卷 1 号～9 卷 12 号<sup>25)</sup> 11 卷 2 号<sup>26)</sup>～24 卷 4 号) 斎藤勇<sup>27)</sup> (9 卷 1 号～24 卷 4 号) 角田松濤 (9 卷 1 号～11 卷 1 号)

- 
- 研究する。1898 年大学院を退学。第五高等学校教授に就任。1901 年に高等学校教授。1905 年第一高等学校教授に赴任。1908 年東京帝国大学文科大学講師、翌年助教授。1914 年ドイツ語学習・研究誌『独逸語』を創刊、主筆に就任。1920 年ドイツ語とドイツ文学研究のため私費留学。1922 年 6 月文部省から官費を支給されドイツ文学研究を命ぜられ、留学を半年間延長。同年 11 月帰国。1923 年東京帝国大学教授、ドイツ語及びドイツ文学第二講座を担当。1933 年東京帝国大学を退職。法政大学に勤務。主著に『独逸文学と其国民思想』(春陽堂、1924) (上村直己「東京帝国大学独逸文学科教授 青木昌吉」『近代日本のドイツ語学者』鳥影社、2008、155-212 頁)
- 23) 1885-1961、山形県生まれ。1903 年荘内中学校卒業、第一高等学校に進学。1906 年一高を卒業後東京帝国大学文科大学哲学科に進学。1908 年東京帝国大学を卒業、大学院に進学。1911 年東京帝国大学哲学研究室副手。1917 年慶應義塾大学予科教員に赴任。1920 年慶應義塾から学費を支給されてドイツ留学。同年慶應義塾大学教授に昇進。1930 年東京帝国大学文学部教授。1945 年退官。1947 年北海道大学法文学部新設に伴い学部長に就任。1951 年に北大を退官後中央大学文学部哲学科教授に就任。主著に『岩波小辞典』(1930)『最近のドイツ哲学』(1944) (木村立子『哲学者伊藤吉之助先生の思い出』)
- 24) 1879-1943、新潟県生まれ。東京帝国大学を卒業後 1906 年から早大でおしえ、ドイツ留学後教授となり独文科をそだてる。ノバーリスなどドイツ文学の翻訳、紹介につとめた。主著に『現代の独逸戯曲』『独逸文学概論』など。(上村 (2008) 403-406 頁)
- 25) 青森県連隊に入営するため、一時離脱。
- 26) 除隊に伴い復帰。
- 27) 1887-1982、福島県に生まれる。1900 年福島県立福島中学校入学。1905 年代に高等学校に入学。1906 年日本基督教会で受洗。1908 年東京帝国大学文科大学英文学専修に入学。上京に伴って、植村正久が牧師を務める富士見町教会に転会。1911 年東京帝国大学卒業。卒論の題名は“Tennyson: His Mind and Art” 1913 年東京帝国大学講師。1917 年東京女子高等師範学校教授に就任。1923 年東京帝国大学助教授に昇進。在外研究員として欧米出張。1925 年帰国。1927 年文学博士号授与。1931 年東京帝国大学教授に昇進。1946 年宮中にて進講。テーマは「キリスト教の中心思想」。1947 年東京帝国大学を定年退官。以後東京女子大学、国際基督教大学などの教授職を歴任する。長男光はアメリカ文学者、次男真は政治学者となり、それぞれ東京大学の教授となった。1982 年統合失調症を患っていた孫に惨殺され非業の死を遂げた。(斎藤和明「小伝」『英語青年』128 号 (研究社、1982-11) 2-3 頁)

岸田繁次郎 (9 卷 2 号~11 卷 11 号) 宮坂喆宗 (10 卷 8 号~24 卷 4 号) 島本愛之助 (13 卷 1 号~24 卷 4 号) 岩井勇蔵 (13 卷 1 号~24 卷 4 号) 土田誠一<sup>28)</sup> (14 卷 1 号~24 卷 4 号) 藤岡蔵六 (14 卷 8 号~24 卷 4 号) 神代峻通 (16 卷 5 号~24 卷 4 号) 見尾勝馬<sup>29)</sup> (17 卷 1 号~24 卷 4 号) 熊崎閑田 (19 卷 1 号~24 卷 4 号) 伊藤惠 (19 卷 1 号~24 卷 4 号) 長谷川哲平 (20 卷 5 号~24 卷 4 号)

28) 1887-1945。1887 年 2 月 21 日、秋田県由利郡矢島町に生まれる。1893 年 9 月矢島尋常小学校に入学。1897 年 3 月同校を卒業、高等科に進学。1901 年 3 月秋田県由利郡立尋常小学校準教員検定準備場に入る。同年 10 月終業。1902 年 4 月矢島町元尋常小学校準訓導。同年 4 月秋田県師範学校に入学。1907 年 3 月秋田県師範学校を卒業、4 月には東京高等師範学校に入学。1911 年 3 月東京高等師範学校本科英語部を卒業、高等学校卒業検定試験に合格。同年 9 月東京帝国大学文科大学文学科英文学専攻に入学。1912 年二高校長三好愛吉の勧めにより哲学科に転科。1919 年旧秋田藩主佐竹義春の推薦によって九条侯爵家嫡男の教育を委任される。同年 7 月東京帝国大学卒業。卒論は「ソクラテス研究」。次いで大学院に進学、井上哲次郎の下で「日本道徳の研究」に専念。三好愛吉・釈慶醇の推薦によって杉浦重剛と面会。杉浦の著作『倫理進講草案』作成に協力する。1917 年 4 月成蹊実業専門学校講師。同年 12 月 18 日杉浦重剛宅に赴き杉浦過去五十年の回顧談を聴く。1919 年 1 月、東京帝国大学文科大学助教授に就任、同時に学生監心得に任命される。3 月 23 日、東京女子高等師範学校校長高峰秀夫の次女敬子と結婚。媒酌人は浜尾新。1920 年東京帝国大学学生監に就任。1921 年 4 月、東京帝国大学助教授 (文学部)、倫理学講座を担当し「日本道徳思想史」を講義。同年 7 月、杉浦重剛主宰の称好塾の塾友となる。同 12 月文学部事務取扱を命ぜられる。1925 年 7 月倫理研究のため 2 年間の独・英・米に留学。1927 年 9 月 15 日帰国。同 11 月東京高等学校教授兼東京帝国大学助教授に就任。1928 年 10 月東京高等学校生徒主事兼東京高等学校教授に就任。1929 年 2 月 13 日杉浦重剛の追悼会で右翼暴漢に襲われた井上哲次郎を庇い、頭部を負傷。1932 年 3 月神宮皇學館教授に就任、神道科主任に。1934 年成蹊学園理事に就任。1935 年神宮皇學館の修学旅行団団長として満州・朝鮮を旅行。途上京城で「わが国」について講演する。1937 年 4 月神宮皇學館教務部長に就任。同 8 月神宮皇學館を依願退職。翌月成蹊高等学校長兼成蹊小学校長に就任。1945 年腸閉塞のため逝去。主著は『矢島市談』(矢島郷土史研究会『吉川惟足の神道説』(私家版、1932)) (小嶋鉦作『土田誠一先生小版、1980』)

29) 岡山県出身。東京帝国大学で哲学を専攻。卒業後、教鞭を執りつつ哲学・心理学等の著作を刊行した。主著は『王陽明の哲学』(甲子社書房、1927)『和歌論語』(文原堂、1936)、『心理学原論』(天地書房、1928)

このうち、最も長く刊行に関わっていたのが、独文学者の葉山萬次郎と文学者の鈴木三重吉である。しかし、三重吉は名義だけ貸していた、名ばかり委員だったようだ。友人の加計正文への書簡には、近頃学校で自分が『東亜之光』の主筆になったとのうわさが立っているが、それは「井の哲から頼まれて名だけ」貸しているのであって、「あんな雑誌の主筆には死んでもならない」と本音を述べている<sup>30)</sup>。

『東亜の光』刊行当初は経済的に運営に困窮したようだ。浦谷の回想によれば、刊行当初特に1908年から1911年頃までは井上に臨時支出の補てんを依頼することもあった。また、芳賀矢一も浦谷・島本・高木の頃まで刊行を支援したようだ<sup>31)</sup>。

『東亜の光』は毎月会員に配布された。会員は会費とは別に前金を支払、発送を受けた。しかし、藤岡の発送停止の励行宣言から推測するに会員には前金支払いの有無に関わらず発送されていたようだ。また、その価格は新年号や特集号などの大部の号を除いて頁数で値上げすることはなかった。しかし、大戦後の不況の影響の為、次第に値上げを行うようになった。

『東亜の光』の出版社は弘道館→富山房→東亜協会→明治図書出版社→甲子社書房→東亜協会と変遷した。この内明治図書出版社と甲子社書房は会計業務も担当した。遠藤隆吉が東亜協会の経営を引き継いだ後、『東亜の光』は『大東』と改称し、巣園出版が出版業務を担当した。『大東』は1941年、37巻6号まで発行を確認している。

『東亜の光』は項目名に違いはあるが、発刊当初から口絵・巻頭言・研究・小説・詩歌・新刊紹介・海外事情・学界事情・彙報と大まかな内容は一定して

---

30) 「明治39年12月28日付、加計正文宛」(『鈴木三重吉全集』第6巻(岩波書店、1938)115-118頁。三重吉の文面からは井上に対する敬意は感じられない。しかし、「1908年10月13日付 小宮豊隆宛」(同、174頁)では、井上から浦谷熊吉を介して結婚祝い(鶏卵箱)を送られ、現金なことに「井上氏は大に話せる」と評価を一変させた。

31) 浦谷(1926)、375頁。

いた。

毎号西洋画や日本画が巻頭に口絵として掲載された。掲載される絵画は会員から提供されたものもあり、毎号会員による解説が掲載された。この口絵のために『東亜之光』が発禁処分を受けたことがあった。1916 年 11 巻 6 号は口絵にルフェーブルの裸婦画を用いた。そのため当局から公序良俗に反するとして注意を受けたのである。

巻頭言は「教界春秋」と題して第 4 巻 6 号から第 19 巻 12 号まで掲載された。同欄は井上が執筆し<sup>32)</sup>、「教育、宗教其他主として日本の教界に関する道徳的批判」を述べた<sup>33)</sup>。井上がベルギーで開催された万国学士院会議に出席した 1922 年には半年間、評議員らが交代で執筆を担当した<sup>34)</sup>。

研究欄の記事には協会の会員の研究会や講演の文字おこしが主に掲載されたが、小説や新年号・特集号に掲載された論文は協会から依頼して書き下ろしを掲載したものと思われる。また、委員は毎号海外事情・学界事情、新刊紹介、時評などの記事を毎回書き下ろした。これらの記事には無記名のものが多いがイニシャルや号が掲載されているものがある。

初期には幸田露伴、戸水寛水らの訪問録が掲載されるなど様々な試みがなされていたが、1 巻 2 号から独立した項目として研究欄が設けられ、倫理学・教育学・心理学・哲学などの分野の論考が掲載されるようになった。また、規約には会員からの投稿を受け入れる旨が記されており、会員の論考を積極的に誌面に反映する努力がなされていた。読者投稿欄も不定期にだが設けられた。独立した欄とされたのは藤岡蔵六の時代である。中でも長期にわたって継続されたのは、詩歌の投稿欄である。2 巻 6 号からは会員から詩歌の寄稿募集が始まり、5 巻 1

---

32) 「井上哲次郎『春秋』と其の影響に就いて」(『東亜之光』第 21 号 10 (東亜協会、1926-10) 1-11 頁)

33) 同、8 頁

34) 執筆の代役は以下の通り。

17 巻 8 号：芳賀矢一、9 号：友枝高彦、10 号：遠藤隆吉、11 号：大島正徳、12 号：今井時郎

号からその掲載が始まった。和歌は尾上八郎<sup>35)</sup>(柴舟)、俳句は大石正信(堯石)のちに志田義秀<sup>36)</sup>(素琴)が選者となった。この詩歌欄は7巻12号で一旦廃止されたが、9巻1号から復活し11巻1号まで続いた。11巻2号では尾上の選歌のみが掲載され。それも11巻3号を最後に途絶えた。だが16巻8号から再び掲載されるようになり、和歌・俳句に加えて新体詩の募集も始まった。

しかし、主な記事は会員の論考だった。論考は会員の講演の文字起こし、評議員・委員の書き下ろし、会員からの寄稿によって集められた。第一世界大戦後の不況の影響から13巻の頃からは頁数が減り、講演会・研究会の講演の速記録を文字起こししたものがそのまま連載された。投稿された論文は『東亜の光』編集委員が目を通し、訂正等を要求されることがあり、掲載を拒否されることがあった。河上肇の論文をめぐる顛末を鑑みるに<sup>37)</sup>、協会の意向にある程

35) 1876-1957、岡山県生まれ。号柴舟。東京帝国大学国文科卒業。東京女高師、女子学習院教授などを経た。落合直文の「あさ香社」に参加したが、金子薫園と共編の『叙景詩』(1902)で、当時の『明星』的歌風に対抗する叙景歌を主張した。1905年(明治38)若山牧水、前田夕暮らと「車前草社」を結成。さらに歌誌『車前草』(1911創刊)を経て、14年(大正3)『水囊』を創刊した。この間、「短歌滅亡私論」(『創作』1910.10)の評論は反響をよんだ。詩歌集『銀鈴』(1904)の浪漫的な歌風から、日常性、現実性を重んじる、思索的で平明な歌風に移行。書家としては仮名の大家として知られ、芸術院会員となった。主要な作品に『静夜』『永日』『日記の端より』『晴川』などの歌集、『ハイネの詩』『金帆』の詩集、『新釈新古今和歌集』『平安朝草仮名の研究』などの古典研究がある。(水囊社『尾上柴舟小誌』)

36) 1876-1946、号素琴。富山県生まれ。1891年富山尋常中学校に進学。1896年第四高等学校に進学。在学中に俳句に興味を持ち、句作を始める。北国新聞の募集句で天位を獲得するなど才覚を現した。1901年志田ノブと結婚、志田姓となる。1904年東京帝国大学文科大学国文学科に進学。芳賀矢一・藤岡作太郎に師事する。特に芳賀からは『日本類語大辞典』編纂の指導を受けた。1908年第六高等学校講師に赴任。翌年教授に昇進。六高では多くの俳人を育て、中には内田百閒がいた。1939年成蹊高等学校教授に就任、国学院大学の講師を兼ねた。翌年東京帝国大学の講師となった。(志田常無「志田義秀・延義の功績と父(延義)の思い出」『我聞如是』(富山仏教会会紀要)富山仏教会会、11号、2012、96-99頁)

37) 河上は『東亜の光』に執筆するよう度々催促を受けていた。そこで、1911年3月『東亜の光』第6巻3号に掲載された井上の社会主義批判の講演「現代思想の変化に対する覚悟」に対する反論文を投稿した。しかし、編集委員は掲載を拒否し、

度沿った論稿が掲載されていたようだ。

彙報には入会者や会員の動静が掲載された。会員の数が増えると評議員の動向と協会の人事情報のみが掲載されるようになった。中でも井上の動静は詳細に掲載されている。それにとどまらず、井上の家族の動静も詳報が載り、1917 年 9 月の井上夫人の葬儀や 1924 年 11 月の古希の祝宴に至っては参列者の一覧も掲載されている。他の評議員、例えば芳賀や有馬らの動静は簡単にまとめられているのを鑑みると、協会運営における井上の存在感がうかがえよう。

『東亜の光』はどの程度普及していたのかを詳らかに物語る資料は発見できていない。しかし、『異軒日記』には発行部数を記しているものがある。それによれば、1910 年時点で 1 月 3400 部、2 月 3300 部、3 月 3200 部、4 月 3400 部、8 月 3250 部、9 月 3300 部、12 月 3360 部となっている<sup>38)</sup>。一方で、1910 年 10 月 14 日時点の会員数は特別会員 661 名、通常会員数十名、賛助員 518 名であり、発行部数に大きな開きがある。後述するように井上は、目ぼしい知識人に入会案内を送るなど積極的な会員獲得運動を行っていた。『東亜の光』はその際、案内書と一緒に送られることもあった。また、請われてバックナンバーを送ることもあったようである。こうした活動が実ってか、1911 年には 1 月号 4000 部が一日で売り切れるなど盛況となったようだ<sup>39)</sup>。

## 第 2 項 講演会活動

『東亜の光』刊行と並んで協会の主要事業となったのが、講演会・講習会活

---

「かくかくの条件を承諾するならば掲載してやろう」と条件を提示された。この対応に意地になった河上は『中央公論』に原稿を送り、訂正なしで掲載させた。(河上肇「ダーウキニズムとマルキシズム」(『中央公論』27 卷 4 号 (1912-4) 16-37 頁) 16-17 頁)

38) 井上哲次郎「異軒日記 明治四三年」(『東京大学史紀要』(東京大学文書館、2015) 61-114 頁)

39) 「午后、岸田繁次郎来訪す、「東亜の光」四千部一日にして盡く売切れたるが為なり」(井上哲次郎「異軒日記 明治四四年」(『東京大学史紀要』65 頁、1 月 29 日付)

東亜協会について (図表 1)

回 氏名	第1回 ~第6回	第7回 ~第12回	第8回 ~第18回	第19回 ~第24回	第25回 ~第30回	第31回 ~第36回	第37回 ~第42回	第43回 ~第44回	合計
井上哲次郎	6	5	6	5	6	5	4	2	39
三宅雪嶺	2	1	1	1	2				7
遠藤隆吉	2			1		2	1		6
加藤弘之	3	2							5
松本亦太郎			1	1	2	1			5
箕作元八		2	1	2					5
吉田熊次		1	1		1	1	1		5
吉田静致			2		1	1	1		5
大澤謙二	1	2	1						4
長瀬鳳輔		1	1	2					4
石川千代松	1		1			1			3
大島正徳					2		1		3
紀平正美				1		1	1		3
芳賀矢一	1	1	1						3
福来友吉	1	2							3
補永茂助							2	1	3
上田敏	2								2
内ヶ崎作三郎					1	1			2
丘浅次郎		1	1						2
加藤玄智		1				1			2
黒板勝美				2					2
瀧精一				1		1			2
建部遯吾		1			1				2
坪井正五郎		2							2
鳥居龍蔵						1	1		2
長岡半太郎			1	1					2
春山作樹							1	1	2
樋口秀雄	1		1						2
藤井健治郎	1	1							2

動である。

#### ○東亜協会講演大会

東亜協会講演大会は 1907 年 2 月から 1928 年 11 月にかけて 5 月と 11 月にそれぞれ開催され、合計 44 回開催された。講演大会では協会の委員が司会を務め、協会の評議員や会員の中で声望ある有識者が弁士を務めた。会場には初期には東京高等商業学校の大講堂を後には東京帝大の大教室を使い、毎回 200～500 名前後の来会者を集めたようだ。弁士は文科大学の教授を中心に多岐に渡る。登壇回数が最も多かったのは井上哲次郎で 39 回と、ほぼ毎回講演している。初期には三宅雪嶺や加藤弘之ら井上の同世代もしくは前の世代の哲学者が講演しているが、後には吉田熊次・吉田静致ら文科大学の倫理学教授が多く登壇するようになった。また佐藤鐵太郎・佐藤鋼次郎のような軍人や長岡半太郎・丘浅次郎ら科学者の登壇があったことも確認される。1920 年 11 月の講演大会からは散会後の晩餐会席上で軍人や帰朝者の見聞談が披露された。講演大会の講演録は『東亜の光』の研究欄に掲載された。

図表 1 は複数回講演した人物の一覧である。

#### ○夏期講習会

夏期講習会では 8 月に 6 日ほど開催された。1909 年から実施され、東京帝大の哲学・教育学・心理学の教授が講師となった。しかし、他団体の夏期講習が充実したことと会員、特に井上哲次郎が地方公演や避暑などで夏場東京にいないことが多くなったことで講師の確保が難しくなり次第に開催されなくなった。1925 年と 26 年には開催されたが、その後開催されることはなかった。協会の経営が遠藤隆吉に受け継がれると再び開催されるようになった。

### 第 3 項 研究会

『東亜の光』刊行に並ぶ、東亜協会の主要な活動だったのが各種の研究会である。これらの研究会でなされた講演や議論は速記録に記録され、その次月以降の『東亜の光』に掲載された。

東亜協会について (図表 2)

年 氏名	1906 ~1909	1910 ~1912	1913 ~1915	1916 ~1918	1919 ~1921	1922 ~1924	1925 ~1927	1928 ~1929	合計
鳥居 龍 蔵	2	2	2	2	2	2		1	13
井上 哲次郎		1		4			2	1	8
白鳥 庫 吉	1		2	1	3				7
常盤 大 定	1		1	1			2		5
黒板 勝 美		1	1	1		2			5
山本 信 哉			1			1	1	1	4
加藤 玄 智	1		1	1	1				4
宇野 哲 人		1	1	1	1				4
鷺尾 順 致				1	1	1			3
高桑 駒 吉					1	1	1		3
堀岡 文 吉							1	1	2
齋 藤 勇							1	1	2
久米 邦 武	2								2
上田 萬 年	1					1			2
金澤 庄三郎	1		1						2
三上 参 次	1		1						2
村上 専 精		1		1					2
萩野 由 之		1	1						2
谷津 直 秀		1		1					2
筧 克 彦		1	1						2
田中 義 能			1			1			2
石橋 智 信				1			1		2
後藤 朝 太郎				1		1			2
和田 英 松				1	1				2
津田 敬 武					1	1			2
入澤 宗 壽						1	1		2

### ○東亜協会例会

東亜協会本体の研究会としてあったのが、例会である。この例会は隔月で開催された。初期にはテーマを決めて 5~10 名程度の弁士が講演し、その内容をまとめたものが出版された<sup>40)</sup>。後には登壇者の数が 2・3 名に減り、テーマにも統一性が無くなった。1908 年 11 月に堀田相爾を幹事として「東亜協会研究部」が設置された。この研究部の詳細な活動内容は更なる分析が必要だが、協会が研究活動を活性化しようとする意志を持っていた証左になるだろう。

### ○日本学会

日本学会は 1907 年に有馬祐政が結成したものを 1908 年に吸収する形で成立した。この研究会は「哲学、倫理、宗教、教育、言語、伝説、文芸等日本の文明に関する理論と実際とを考究する」<sup>41)</sup>ものと位置付けられ、東亜協会例会が開られない月に隔月に開催されるとされた。藤岡の編集主任時代に日本学会例会の告知が『東亜の光』誌上に掲載されるようになり、会費(年 30 銭、次月より 40 銭に値上げ)が設定されるなど会の運営が活発化し、日本学会のみに入会する者がでるなど、協会の後期まで存続した。例会の弁士には鳥居龍蔵などの人類学者や軍人が招かれ、アジアの諸民族の文化や習俗を紹介したり、日露戦争の体験談や第一次世界大戦の戦況報告が披露されたりした。

図表 2 が複数回講演した人物の一覧である。

### ○国体研究会

40) 初期の研究会の題目、出版された書籍は以下の通り。

(1908 年 3 月開催)「国民生活と宗教」(東亜協会研究部編『国民生活と宗教』弘道館、1909)

(1909 年 3 月開催)「女大学の研究」(東亜協会編『女大学の研究』弘道館、1910)

(1909 年 11 月開催)「論語」

(1910 年 4 月開催)「赤穂義士について」(『東亜之光』「赤穂義士号」第 6 号(臨時号) 1910-6)

(1910 年 11 月開催)「家族制度について」(東亜協会研究部編『国民生活と家族制度』目黒書店、1911)

41) 「日本学会規則」第 1 条(『東亜之光』4 卷 2 号、1909) 7 頁

1916年に設置されたのが国体研究会である。この研究会は東亜協会の部会として設置され、上杉慎吉、吉野作造ら法学部教員から始まり、鹿子木員信、本多日生など国粹主義者、僧侶が講演した。この研究会は1916年12月から1918年3月まで11回の例会開催を確認した<sup>42)</sup>。

#### ○思想問題・社会問題研究会

1919年、当時編集主任だった藤岡蔵六が中心となって結成したのが思想問題・社会問題研究会である。この研究会は思想問題・社会問題を純学理的に研究することが目的とされた<sup>43)</sup>。来会者は会費として10銭を徴収された。穂積重遠ら法学者や社会学者を招いて労働問題や民法問題などの社会問題に関連する講演会<sup>44)</sup>を開いた。この研究会は4回開催された。

このほか、初期には百人一首研究会が一度だけ開催され、その議事録が『東亜の光』の附録に掲載された。

このような研究会・部会の設置は何故繰り返されたのだろうか。東亜協会本体は教育者を主たる会員とする以上、言説や研究内容が既存の教育内容から過

42) 研究会で講演した人物と題目は以下の通り。

- (第1回) 上杉慎吉「我国の国体」(1916年11月10日開催)
- (第2回) 笈克彦「国体の観念」(1917年12月16日開催)
- (第4回) 吉野作造「国体問題に就いて」(1917年4月29日開催)
- (第5回) 浮田和民「国体之研究」(1917年5月16日開催)
- (第6回) 本多日生「日蓮上人の国体観」(1917年10月6日開催)
- (第7回) 佐藤鐵太郎「国体之研究」(1917年11月16日開催)
- (第8回) 大島正徳「予の国体観と国家人格論」(1917年12月16日開催)
- 鹿子木員信「国体の主要問題」

- (第9回) 吉田静致「同円異中心主義と国体」(1918年1月19日開催)
- (第10回) 吉田熊次「国体の意義」(1918年2月10日開催)
- 高島平三郎「我国の歴史的発達」

- (第11回) 井上哲次郎「国体の歴史的発達と国際比較」(1918年3月24日開催)

43) 「思想問題社会問題研究会規約」第2条(『東亜の光』14巻9号、1919)

44) 弁士と講演題目は以下の通り。

- (第2回) 穂積重遠「現行民法と個人主義」(1919年11月7日開催)
- (第3回) 吉田静致「矛盾の生活」(1920年1月27日開催)
- (第4回) 河津暹「労働組合に就いて」(1920年5月27日開催)

度に逸脱することは難しかったのだろう。そこで言説の場を新たに設置することで社会の変化に適応しようとしたのではないだろうか。

#### 第 4 項 出版活動

東亜協会は研究会や講演会の内容を書籍にまとめ、出版していた。代表的なものは『国民生活と宗教』（弘道館、1909 年）『倫理研究』（弘道館、1910 年）『女大学の研究』（弘道館、1910 年）『現代女性観』（弘道館、1917 年）『国民教育と家族生活』（目黒書店、1919 年）『東洋思想研究』（甲子社書房、1928 年）などがある。また、甲子社書房は「東亜書院」と題して、東亜協会参加者を著者にした叢書の出版を企画していたが、すべて刊行される前に甲子社書房との関係が断絶してしまった。

### 第 3 節 東亜協会の参加者

#### 第 1 項 会員

協会への入会は会計担当に会費と入会する旨を郵送することで承認された。井上の日記には毎日のように入会者の氏名が記載されている。入会した会員は年会費を徴収された。半年ごとに半額を郵送する形で徴収され、後には口座振替形式がとられた。

発会当初は東京帝大卒業生もしくはそれに相当する者との制限があった<sup>45)</sup>。その制限通り、都下の中学校教員や師範学校教員の入会が多くみられる。しかし、第 1 巻 8 号の時点で地方学校（真邊政雄：兵庫県立工業学校）や軍人（平野博：韓国北青歩兵 50 連隊）の加入が見受けられる上、女性の入会（真壁ぬ

---

45) 「当時の会員資格は帝国大学出身か若くは、それに相当したほどの人でなければならぬといふことになってあった」同、375 頁

い子・中井あい子)も確認されるため、この制限は当初からなし崩しになっていったものと思われる。また、東亜協会の運営が軌道に乗るにつれて、僧侶の加盟・投稿が増えていく。さらに寺や部隊単位の入会も観られる。これらの施設の入会は『東亜の光』の配送を受けるための措置であると考えられる。

先述の通り、井上は積極的な会員獲得活動を行っていた。例えば、知識人に対する入会案内書送付がそれである。その結果、徳富蘇峰・夏目漱石などは賛助員という、会費を支払わなくてもよい身分で入会している点で井上との距離を感じさせる。また、東京帝大の学生が集団で入会しているケースが見られた。井上に対する態度が入会者の身分に反映されていたものと思われる。

東亜協会の身分には特別会員・通常会員・賛助員に分かれ、規約上の差が設けられていた。協会の規約には特別会員は「都下に在りて特に本会の事業に協同する者」<sup>46)</sup>、通常会員は「本会の事業を賛成し規定の会費を納むる者」<sup>47)</sup>、賛助員は「名望ある人にして本会の事業を援助する者」<sup>48)</sup>と規定され、特別会員と通常会員が会費を支払った。1906年7月(1巻3号)から年1円44銭を徴収する旨が告知され、会費の徴収が始まった。1907年からは特別会員2円に値上げされたのに対し、通常会員1円44銭に据え置かれ待遇に差がつけられたが、1908年8月から通常会員も2円に値上げされ、待遇上の差はなくなった。さらに、1912年から2円50銭に、1918年には3円、1919年10月には3円60銭、1921年からは4円、1924年には4円20銭に値上げされ、以後1929年まで据え置かれた。また、1918年12月には通常・特別会員の区別を無くしすべて会員扱いする旨が告知され1919年からは待遇上の差は消滅した。浦谷によれば、初期の特別会員の加入には堀田相爾の貢献が大きかった<sup>49)</sup>。東亜協会の歴史は会費を納めてもらう試みの歴史と言っても過言ではない。『東亜の光』誌上には会費納入のお願いが毎号のように掲載されている。会費未納者に対しては『東亜の光』発送の停止

---

46) 東亜協会規則、第5条。

47) 東亜協会規則、第6条

48) 東亜協会規則、第7条

49) 浦谷(1926)、375頁

などのペナルティが課されたようだが、これは徹底されていたわけではないようだ。4代編集主任藤岡蔵六は編集後記で上記ペナルティの励行を宣言している<sup>50)</sup>。

入退会・住所変更の連絡、会費の納入先は会計主任の住所となっており、入退会の管理、会費の収集は会計主任が管理していたが、1925年4月からは出版元の明治図書株式会社に委託した。さらに、1926年6月東亜協会が明治図書との関係を断ったのち1928年まで甲子社書房が担当したが、これも1928年9月に断絶し、編集主任の長谷川哲平が会計を兼任する形で引き継いだ。

『東亜之光』の彙報には入会者の氏名のみが記載され、退会者の氏名は記載されていない。毎号の巻末には会員名簿が掲載されているが、4巻以降は掲載されなくなった。会員数が増えるにつれて紙幅が圧迫されるようになったためと思われる。協会の運営に携わっていた評議員と委員の名簿は掲載され続けていたが1914年から掲載されなくなり、年賀のあいさつに委員の氏名が巻頭に掲載されるのみとなった。再び評議員の氏名が掲載され始めたのは、1924年12月に附録の形で配布された会員名簿からである。こうした変化の背景には1913年に評議員である福来友吉が千里眼や念写などのスピリチュアリズムに傾倒し同年10月に東京帝大から休職処分を受けた事件が原因と思われる。おそらく、福来の除名を伏せるために掲載が見送られたのではないだろうか<sup>51)</sup>。

## 第2項 評議員と委員

協会の運営に携わったのは、会員から選出された評議員と委員だった。評議員は協会の重要事項を決定すると規定されていた<sup>52)</sup>。『異軒日記』によれば、半

---

50) 「会費滞納者には「東亜之光」発送を停止す、と云ふ会則を、本年から励行致します」(『東亜之光』、15巻1号、1920、93頁)

51) 福来の休職は1913年12月発行の『東亜之光』8巻12号の「彙報」欄に記載されている。

52) 東亜協会規則、第10条

年に1回程度の頻度で評議会が開催されていたようだ<sup>53)</sup>。累計して22名の評議員が名を連ねた。

まず、1906年の結成当初から評議員となったのが、井上哲次郎・芳賀矢一<sup>54)</sup>・

---

53) 例えば井上哲次郎『巽軒日記 明治二六一二九年、四〇、四一年』『東京大学史紀要』、104・132頁。

54) 1867-1927、越前国生まれ。芳賀家は代々国学を志、父真咲は多賀・湊川神社などの宮司を歴任した。1889年第一高等中学校文科を卒業し、東京帝国大学文科大学国文科に入学する。在学中『国文学読本』を著し注目された。1892年帝国大学卒業、大学院に入り小中村清矩の指導を受ける。1894年第一高等学校の講師となる。担当は国文学。翌年1月には『帝国文学』発刊の発起人、1897年には『日本主義』を発刊するなど日本主義運動に積極的に参画した。1899年5月に東京帝国大学文科大学助教授となり、翌年6月には文学史研究のためにドイツ留学を命ぜられる。1902年8月に帰国。翌9月には東京帝国大学文科大学教授となり日本詩歌学・国文学思想史・日本文献学等を講義する。1903年文学博士号を受ける。1922年東京帝国大学を退官。1927年2月心臓性喘息のため死去。主著に『国民性十論』(富山房、1906)『国文学読本』(富山房、1890)『日本家庭百科事彙』(富山房、1906)(千葉真郎「芳賀矢一」山田孝雄編『近代日本の倫理思想』206-209頁、大明堂、1981)

尾上八郎・吉田静致<sup>55)</sup>・畔柳都太郎<sup>56)</sup>・福来友吉<sup>57)</sup>・深作安文<sup>58)</sup>である。翌年

- 
- 55) 1872-1945、信州生まれ。1895 年第一高等学校、1898 年東京帝国大学文科大学哲学かをともに主席で卒業。1899 年 5 月倫理学研究のために独英に 3 年留学。1902 年 11 月帰国。翌月東京高等師範学校教授に任ぜられる。1919 年文学博士号授与。同年東京帝国大学教授（倫理学担当）に就任する。1921 年 4 月から 11 月にかけて学事視察のために欧米出張。1924 年日本大学文学部新設に伴い、教授会座長となる。後に文学部長。1926 年東京帝国大学文学部倫理学第一講座担当となる。1928 年 3 月倫理学会設立に伴い、会長に就任。1933 年東京帝国大学を退官。日本大学に力を注ぐ。1939 年日大三高の校長に就任。死去するまで務めた。主著に『倫理学講義』（育成会、1903）「倫理学の原理に関する研究」（学位請求論文、1919、未刊行）『道徳生活の原理』（甲子社、1932）（「吉田静致」同、276-284 頁）
- 56) 1871-1923、号芥州。帝国大学在学中『帝国文学』の編集員となり、卒業後は『太陽』『反省雑誌』などに文芸評論を公表。1898 年第一高等学校教授に就任。1907 年に刊行した『文談花談』は比較文学研究の先駆けとなった。（『日本人名大辞典』）
- 57) 1869-1952、岐阜県生まれ。1893 年第三高等学校入学。1894 年第二高等学校に転学し 1896 年に同校を卒業し東京帝国大学文科大学哲学科に入学する。東京帝国大学ではケーベルに師事して西洋哲学を学ぶ。また、元良勇次郎の影響を受け心理学を志す。1899 年大学院に進学。心理学を専攻し、1906 年催眠術の研究で文学博士号を授与される。1908 年東京帝国大学助教授となる。1909 年から千里眼と念写の实在を証明するべく、御舟千鶴子ら千里眼能力者の実験を繰り返す。しかし、千里眼や念写が科学的に認められることはなく、1913 年東京帝国大学から追放された。1917 年生命学会を設立。1919 年自身も超能力を身に付けるため高野山で修行。1921 年宣真高等女学校校長に就任。1926 年高野山大学教授に就任。1928 年大日本心霊研究所を設立し。1940 年高野山大学を退職し、心霊研究に専念する。1941 年大日本心霊研究所を敬神崇祖協会と改組。1945 年仙台に移住。1946 年敬神崇祖協会をむすび協会と改組する、また戦中の活動のために公職追放を受ける。1952 年死去。支持者は 1960 年に福来心理学研究所（HP: <http://www1.odn.ne.jp/fukurai-psycho/> 最終閲覧日 2019 年 3 月 15 日）を設立し、現代に至るまで活動を続けている。主著に『催眠心理学』（成美堂、1906）『透視と念写』（宝文館、1913）『心霊と神秘世界』（人文書院、1932）（中沢信午『超心理学者福来友吉の生涯』大陸書房、1987）
- 58) 1874-1962、水戸生まれ。1897 年東京帝国大学文科大学哲学科に進学。倫理学を専攻し、井上哲次郎・中島力造に師事した。1900 年大学を卒業。1912 年東京帝国大学助教授となる。1916 年戦亂の欧州を避けてアメリカに留学した。アメリカではデュイ・タフツ・ミードらに師事した。1921 年博士号授与。1926 年東京帝国大学教授に就任。1940 年停年退職。講演と著述活動に専念した。主著に『実践倫理要義』（1929）『公民倫理概論』（1935）『国民道徳要義』（1916）『社会思想の批判的研究』（1933）（深作守文「深作安史」山田（1981）、325-329 頁）

11月には吉田熊次、1908年3月には有馬祐政<sup>59)</sup>・遠藤隆吉<sup>60)</sup>の二名が、5月には白石正邦<sup>61)</sup>が加わった。さらに1911年1月には藤井健治郎<sup>62)</sup>・松浦一が

---

59) 1873-1931、福井県生まれ。東京帝国大学漢学科卒。主著に『新商人道』(同文館、1924)、井上哲次郎との共編に『武士道叢書』(博文館、1906)がある。(『20世紀日本人名大辞典』日外アソシエーション、2004)

60) 1874-1946、群馬県生まれ。1887年龍海院中学校に入学。1892年第一高等中学校予科に入学。1896年東京帝国大学文科大学哲学科に入学。在学中にキディンズの『社会学原理』を翻訳する。1899年東京帝国大学を卒業。1900年東京高等師範学校の講師となり、社会学を担当する。1907年文学博士号授与。1909年私塾巣園学舎を創立。1910年巣園学舎に印刷所を設立。1917年巣園学舎に易学研究所を設置。1922年巣鴨中学校を設置。後藤新平を顧問に迎える。1924年巣鴨商業学校を併置。1928年巣鴨高等商業学校を創設。1934年井上哲次郎から東亜協会の事業を継承。機関誌『大東』の編集責任者となる。1944年巣鴨高等商業学校と巣鴨経済専門学校と改称。(蝦名賢造『遠藤隆吉伝 巣園の父、その思想と生涯』西田書店、1989)

61) 生年不詳-1942、東京帝国大学で史学を学び、学習院教授から東京府立第五高等女学校長を務める。日本教育史研究を手がけ、特に往来物と石門心学に顕著な業績を遺した。主著に『明治教育史』(弘道館、1910)『石門心学の研究』(成美堂、1910)『石田梅巖』(藻岩書店、1941)(「岡村金太郎と往来物」石川松太郎『往来物の成立と展開』、雄松堂出版、1988、4-6頁)

62) 1872-1931、山形県生まれ。第二高等学校を経て東京帝国大学哲学科に進む。1898年大学院に進学。1906年ドイツに留学する。1907年帰国、早稲田大学教授となり、東京高等師範学校・東京外国語学校・東京帝国大学講師を兼ねた。1913年京都帝国大学教授となる。倫理学を担当する。海外出張後、社会学講座を兼ね、後に文学部長となった。二つの講座と学部長の激務に心身を酷使し、1931年半ばに急死した。主著に『主観道徳学要旨』(弘道館、1910)『国民道徳論』(北文館、1910)。(湯浅南海男「藤井健次郎」山田(1981)、268-270頁)

加わり、1914 年 1 月には三輪田元道<sup>63)</sup>・大島正徳<sup>64)</sup>・桑田芳蔵<sup>65)</sup>・浦谷熊吉の四名が加わった。1917 年 12 月には服部宇之吉<sup>66)</sup>が加わり、1918 年 1 月には野田義夫<sup>67)</sup>が加わった。1923 年 1 月の評議員の年賀挨拶には松本亦太

63) 1870-1965、香川県生まれ。1893 年三輪田家の養嗣子となり、養母真佐子が経営していた私塾松翠学舎の経営に携わる。同学舎は三輪田女学校から三輪田高等女学校に昇格した、1927 年真佐子の死に伴い、校長となり三輪田学園の基礎を築いた。(鈴木秀男「三輪田元道先生を偲ぶ」高校教育会編『月刊高校教育』学事出版、2 巻 9 号、1969-9、61-63 頁)

64) 1880-1947、神奈川県生まれ。1904 年東京帝国大学文科大学哲学科を卒業。第一高等学校教授・東京帝国大学助教授を経て 1925 年 9 月教授に昇進するも退官、翌 10 月に東京市教育局長に転じた。その後内外教育評論社の主幹となる。帝国教育会理事に就任し、世界連合教育会議の日本代表となった。1937 年東京で開催された第七回世界連合教育会議では事務総長を務めた。後に同連合教育会のアジア代表副会長となる。その傍ら、東洋大学・日本女子大学の教授を務め、東京市議員にもなった。戦後、教育刷新委員会委員に就任したが死没した。主著に『倫理学概論』(至文堂、1924)『ヒューム 人性論』(岩波書店、1935)『ロック』(岩波書店、1938)『デモクラシーの基本概念』(至文堂、1946)(後藤乾一『国際主義の系譜—大島正徳と日本の近代』早稲田大学出版部、2005)

65) 1882-1967、鳥取県生まれ。第一高等学校を経て、1905 年東京帝国大学文科大学哲学科心理学専修の一回生として卒業。大学院に進学する。1906 年文科大学助手として勤務。1910 年大学院を退学してドイツに私費留学。ライプツィヒ大学でヴントに師事した。1912 年帰国。翌年東京帝国大学文科大学講師に就職。1917 年東京帝国大学文学部助教授。1921 年博士号授与。学位請求論文のテーマは「靈魂崇拜と祖先崇拜—民族心理学的研究」。1926 年文学部教授に就任。1935 年から 39 年まで文学部長に就任。1941 年附属東洋文化研究所初代所長に就任。1943 年定年退職。1948 年大阪大学法文学部初代心理学教授。法文学部長と兼任した。1949 年法文学部改組に伴い文学部長、54 年まで務める。1954 年停年退職。主著に『ヴントの民族心理学』(文明書院、1918)『心理学』(文信社、1927)。(大泉溥編『日本心理学者事典』クレス出版、2003)

66) 1867-1939、福島県生まれ。

67) 1874-1950、福岡県生まれ。幼くして父を失い、村役場の雇吏として勤務する傍ら勉学に励む。16 歳のころ兄の扶助を受けて中学に入学。第二高等学校に合格するも兄の病気によって学資が途絶してしまう。しかし、同県出身の井上哲次郎の支援を受けて勉学を続け、1899 年東京帝国大学文科大学哲学科を卒業、大学院に進学する。桑木巖翼・姉崎正治の下で実践哲学の研究に励み、丁酉倫理会にも参画した。1901 年文部省学務局に就職。勤務の傍ら法学院・和仏法律学校で倫理学を講じた。

郎<sup>68)</sup>・島本愛之助・伊藤恵の名も見えるようになった。

その構成を考えるにあたり、評議員の年齢差を考えてみよう。最年長は井上哲次郎（1856年生）であり、最年少の桑田芳蔵（1882年生）とは26歳の差がある。全評議員の生年を並べると以下のようになる。

1850年代：1名（井上）1860年代：4名（芳賀・福来・服部・松本）1870年代：10名（尾上・有馬・吉田静・畔柳・深作・吉田熊・遠藤・藤井・野田・島本）1880年代：3名（松浦・大島・桑田）不明：2名（白石・伊藤）

1862年生の福来は井上の教え子なので、70年代生まれ以降の評議員は井上や芳賀の教え子だったのだろう。

委員の主要な役割は『東亜の光』刊行である<sup>69)</sup>。その他に会計部・編集部・庶務などの部に分かれ各々主任が置かれた。入退会、会費の納入を担当する会計主任の住所が「東亜協会本部」とされ、奥付の東亜協会所在地に記載された。

また、黒田長成の子弟の教育に従事した。1904年広島高等師範学校教授に就任。1908年欧米留学。翌年から1917年まで奈良女子高等師範学校教授となる。その後文部省に戻り、日本大学などで教育学を講じた。1921年大阪高等学校初代校長に就任。1924年に文学博士号授与。1927年退官。以後関西で活動する。1933年大阪の私立羽衣高等女学校校長、1936年神戸市親和高等女学校校長を歴任。傍ら関西学院大学法文学部で教鞭を執り、倫理学・教育史を講じた。主著に『明治教育史』（育英舎、1907）『現代教育概観』（人文書房、1923）『教育勅語と国民道徳』（大阪市東成区教育会、1932）（二見剛史「野田義夫」山田（1981）、321-325頁）

68) 1867-1943、上野国生まれ。京都同志社、京都府中学校、第一高等中学校を経て1951年帝国大学文科大学哲学科を卒業。大学院に進学し実験心理学を研究し、その基礎として医科に学び解剖実習を修めた。1896年米独に留学。アメリカではイェール大学、ドイツではライプツィヒ大学に学んだ。1899年に文学博士号を授与される。1900年に帰国した後、高等師範学校教授に就任する傍ら東京帝国大学文科大学講師となった。東京帝国大学では元良を助けて心理学研究室の設立に尽力した。1906年、京都帝国大学に文科大学が設立されるとその教授となり、同校に実験心理学教室を設立した。1913年、元良の後任として東京帝国大学の教授となる。1918年から19年にかけて海軍の調査のため欧米に出張。1926年依願免官。著述活動に専念し、日本学士院における出版委員・東亜諸民族調査委員となった。1943年病死。（桑木敞翼「松本亦太郎会員」日本学士院編『学問の山なみ：物故会員追悼集』（日本学士院、198）2巻、160-163頁）

69) 「東亜協会規則」第11条

評議員に任命されたのは帝国大学教授などの倫理学・教育学・国文学などの教育者であり、『東亜の光』誌上に論考を掲載する、講演会で弁士を務めるなど、協会で積極的に発言した。一方委員は主に東京帝国大学の副手や学生、若手の教員から選ばれた。国文学やドイツ哲学の出身の学生・教員が選出されることが多かったことから、選出には井上と芳賀矢一が関わっていたと推測される。

## 小括

以上が東亜協会の概要である。稿を閉じるにあたり、『東亜の光』と東亜協会が近代に日本で如何なる地位を占めていたのかを示唆する事例を三点示しておく。

まず、『東亜の光』について。1920 年 1 月、森鷗外は賀古鶴所に当てた書簡<sup>70)</sup>で、『太陽』新年号に掲載された与謝野晶子の議論と『東亜の光』に掲載された一木喜徳郎と井上の議論とをならべて批判している。鷗外が言及しているのは 1919 年 11 月 16 日に開催された第 26 回講演大会の概要であろう。同講演大会では一木は「世界の大勢と我帝国」、井上は「民本主義と貴族主義」と題した講演を行った<sup>71)</sup>。1 月時点では、これらの講演は掲載されていないが 14 卷 12 号会報に講演の概要が掲載されている<sup>72)</sup>。鷗外は恐らくこれを目にしたのであろう。また、『東亜の光』読者は執筆陣から身内意識を持たれていたようだ。1923 年の関東大震災後、井上は教界春秋で震災を天罰とする天譴論、神罰論は誤りであるが、「日本国民が大震災を天譴又は神罰のやうに心得て深く自ら戒饉することは、實際上効果あることである」<sup>73)</sup>ので、強く批判するべきものではないと述べている。ここには学術的良心と自身の地位との折り合いをつける井上流の論法が表れているとともに、『東亜の光』がそのような内輪

---

70) 森鷗外「大正九年一月二日付、賀古鶴所宛」(『森鷗外全集』第 36 卷 (岩波書店、1975)、563-564 頁、書簡番号 1352)

71) 一木の講演は第 15 卷 3 号に、井上の講演は第 15 卷 1・3・5・6 号に掲載された。

72) 「会報」(『東亜之光』第 14 卷 12 号、59-62 頁)

73) 井上哲次郎「教界春秋」(『東亜之光』第 18 卷 11 号 (東亜協会、1923-11)、1-2 頁) 1 頁

話をしてもよい場だと井上が認識していたことが読み取れよう。つまり、『東亜之光』の執筆陣と読者の間には国民の道徳的指導を行うのだ、という一種の同族意識があったことがうかがえる。上記二点の事例から、『東亜之光』は体制内知識人の間で、国民教導の在り方を相互に表明する場だったことが推測されよう。

次いで、東亜協会の位置づけについて考えてみよう。1917年2月、鈴木三重吉は井上の人脈を用いて求職活動を試みた<sup>74)</sup>。まず、浦谷熊吉の紹介によって目白中学校の校長である「井ノ哲の乾児のポーズケ」有馬祐政と面会した。しかし、有馬は三重吉が小説家であることに難色を示し就職はかなわなかった。その後、井上の紹介を得て慶應義塾の田中萃一郎に履歴書を送った。しかし、田中は三重吉の就職口には関心が薄かったようで、慶應義塾の口には別の人間が収まってしまった。三重吉はなおもあきらめず、再び浦谷の紹介を得て名教中学校の校長龜谷聖馨に面会した。龜谷は三重吉に大いに興味を示し、ぜひとも来てほしいと採用に前向きだった。しかし、授業時数・俸給など条件面が折り合わず、「イマイマしいのでそんな運動はやめ」にしてしまった。

三重吉の求職活動において、仲介役となった浦谷熊吉は先述の通り東亜協会創立当初から活躍した井上の側近である。また最初の求職口である目白中学校の校長有馬は井上とともに『武士道叢書』を出版し、東亜協会の評議員にも名を連ねるなど学術的にも立場的にも井上に近い存在だった。また、第二の交渉相手である田中は1910年に特別会員として入会している。第三の交渉相手龜谷は第3巻4号から『東亜之光』に詩文や論文を寄せている常連投稿者である。こうした関係にもかかわらず就職に失敗したことから1917年当時の井上の影響力の程が知れるが、三重吉が井上の人脈を利用して就職を試み井上の側近である浦谷熊吉が動いたことは確かだ。1917年当時の井上の人脈と東亜協会の会員に重なる部分があり、その影響力が東亜協会を介して発揮されていたことがうかがえよう。これらの事例は東亜協会が、国民道徳論を始めとする大正期から昭和初期にかけて展開された、言論ネットワーク

74) 求職活動の様子は、「大正六年二月十七日付 小宮豊隆宛」(『鈴木三重吉全集』第6巻(岩波書店、1938)331-332頁、書簡番号474)及び「大正六年二月十七日付 浦谷熊吉宛」(同上、331頁、書簡番号473)に詳述されている。

のいわば舞台裏とも呼ぶべき地位を占めていたことを示唆している。その意味で、今後の日本近代思想史研究において無視できない意義を持っているのではないだろうか。

